

『にあんちゃん』論

—— 日記における自己検閲を巡って

奥村華子

✉ 6.3okanako@gmail.com

This paper discusses Nianchan a diary published in 1958. This diary was written by Sueko Yasmoto who is Zainicuh Korean and who lives in a coal mine at the age of the ten. The results of this paper indicate that this diary represents her unstable identity based on a boundary between adult and child, and Zainicuh Korean and Japanese. She writes in her diary about the discrimination against Zainicuh Korean coal miners by the Japanese; not only the tone of writing makes such a claim, but also the fact that it is written in Roman characters, not Japanese. I examined the position of the author as a Zainicuh Korean coal miner by researching the context, including the increase in the number of unemployed Zainicuh people at coal mines during the 1950s. And, as a child of Zainicuh Korean who was educated in Japanese language through 'Seikatsu Tsuzurikata kyōiku', after the war. Also, I analyzed that a description in the Roman alphabet represents the relationship of the author with three readers: her teacher, older brother, and her friend.

Ultimately, I argue that a description in the Roman alphabet is a result of self-censorship to leave a trace of discrimination, but not to convey directly to the three readers. It is significant which unstable identity she chooses between adult and child, and Zainicuh Korean and Japanese.

Keywords Zainicuh Korean(在日朝鮮人), Coal Mine(炭鉱), Seikatsu Tsuzurikata Kyōiku(生活綴方教育), Diary(日記), Self-censorship(自己検閲)

1 はじめに

安本末子『にあんちゃん』は、佐賀県杵島炭鉱大鶴鉱業所を舞台に、両親のいない4人兄弟の生活を末の妹が綴った日記である¹。幼い末子の筆致が辿ったのは、兄が解雇されてから、長兄・姉と離れ、すぐ上の兄「にあんちゃん」とともに転々と間借りしていく日々だった。長兄が、1957年12月に17冊の日記を光文社に送付したことで出版された本書は、1953年1月から1954年9月にかけて1943年生まれの末子が10歳前後の頃に書かれ、出版翌年の1959年にはベストセラーとなっている。後年も反響は著しく²、出版当時の推薦文にある「極貧の生活と耐えがたい心の痛みにもよくたえて生きてゆく人間の姿」³として、本書は戦後の貧しい時代を経験した世代に圧倒的な共感を生んだ⁴。

しかしこのような見方からは、安本一家が在日朝鮮人であることが捨象されている。林相珉は、出版当時の学校教育における読書感想文コンクールという外部のコンテクストから、在日朝鮮人であることには踏み込まず、子どもたちの感受性を養う素材としてのみ本書が消費されたことを論究し、現在に至るまで清貧さの象徴とされてきたことを問題化する⁵。

他方で日記の内部、日記の書きぶり自体にそもそも在日朝鮮人としての自覚が希薄とする見方も多い。杉浦明平は、貧乏の意識はあっても朝鮮人としてのコンプレックスはなく、次男・高一の日記で初版以降削除された部分に「ぼくも朝鮮人の父母からうまれたのではあるが、朝鮮人は大きらいだ」とあることを、「この一家はいちはやく(昭和二年)日本に渡って、すっかり内地人化していた」のだという⁶。小沢有作は、兄弟が「朝鮮人少年少女であることの意味を前にだすことができないまま、朝鮮に背を向けていた」⁷とする。両者は、初版の高一の日記も加味したものであるが、金燠我においても、戦後最も早く登場した在日女性の著作ではあるが「在日朝鮮人ということを前面に出して民族

1 安本末子『にあんちゃん』(東京：光文社、1958)。「にあんちゃん」とは、長男・喜一(東石)、長女・良子、次男・高一、次女・末子からなる4兄弟のうち、2番目の兄の呼称を指す。「にあんちゃん」による日記「炭焼き家に移る」「東京へ行こう」の二篇も共に収録されており、初版裏表紙には著者ととも次男・高一の近影が付されているが、1975年の改訂版以降からは高一の日記の一部が削除され、末子による「付入院日記」(1956年10月から12月)が加えられている。現在確認できるものはおおむねこの光文社改訂版を底本としたものであるが、詳しい異同関係については林相珉『戦後在日コリアン表象の反・系譜〈高度経済成長〉神話と保証なき主体』(福岡：花書院、2011、p.22)を参照されたい。また本稿での引用はすべて光文社の初版により、引用文の後に日記の書かれた日付とページ数を記した。

2 安本東石「増補新版によせて」(『にあんちゃん』東京：講談社、1978)、pp.252-254。ただし初出は、講談社版の底本である光文社改訂版(1975)。東石によれば、1975年7月時点にも多くの手紙が寄せられていたという。

3 坂西志保による光文社初版に付された推薦文。

4 きどのりこ「すなおな心と透徹した目と」『子どものしあわせ、父母と教師を結ぶ雑誌』743号、2013)、p.48。

5 林相珉『戦後在日コリアン表象の反・系譜〈高度経済成長〉神話と保証なき主体』(福岡：花書院、2011)。

6 杉浦明平「にあんちゃん どん底の中の明るさ」(『朝日ジャーナル』8巻41号、1966.10)、p.38。同書評はその後光文社改訂版に「解説」として収録されているが、高一の日記が掲載されていないことを受けてか、杉浦による上記引用部も削除されている。

7 小沢有作「経るべき歴史の通路にて——解説・在日朝鮮人の世界——」(『近代民衆の記録10・在日朝鮮人』(東京：新人物往来社、1978)、p.8。

的アイデンティティーや差別問題をあらわにした作品とも言い難い⁸とされている。唯一在日朝鮮人としての要素を前景化するの成美子だが、初読の際にこの点は意識されず、後年筆者が自身と同じ在日朝鮮人二世であることを知って、共通点に気づいたという⁹。

しかし、上記のように在日朝鮮人としての「民族的アイデンティティー」が感じられないとされることは、在日朝鮮人による表現が「民族的アイデンティティー」と不可分と理解されていることと表裏関係である。『にあんちゃん』においては、第一に同時代の在日朝鮮人による表現がどのようなものとされてきたか、第二に日記という媒体がどのようなものと考えられているかを軸に、読み方が展開されてきたと考えられる。

たとえば在日朝鮮人文学研究の先達とされる磯貝治良は、植民地統治期の抑圧者の言葉である日本語によって自己表現を行うことには、「引き裂かれた存在」としての苦衷が察せられると述べる¹⁰。在日朝鮮人作家による作品は、日本社会に生きることによって生じる葛藤や民族的アイデンティティーの表出として読まれ、出生時期や教育などによる差を通時的な指標とした世代による次期区分が適用されてきた¹¹。

一方で朴裕河は、在日朝鮮人文学へのある種の囲い込みを指摘する。1952年のサンフランシスコ条約の発効以後日本国籍だった在日朝鮮人は「外国人」とされ、1959年に本格化した帰国事業とともに日本社会から排除され始める。血統に基づく共同体によって「日本」が再構築されていく中で、1961年に帰国事業が落ち着きを見せると、日本に残る在日朝鮮人作家らには、あくまで「外国人」として、在日朝鮮人としての生を描くことのみを許す力学が働いたという¹²。

『にあんちゃん』に戻れば、その出版は在日朝鮮人が日本の「他者」として可視化され始めた時期と重なる。おそらく同時代評や先行研究で期待されていたのは、日本社会との葛藤や民族的アイデンティティーの問題だった。そのためこのような表現がないのならば、すなわち「内地人」と同様であると、二項対立的な図式によって評価を受けたといえるだろう。

また本書の特徴は、日記という点である。書かれた内容から筆者を「内地人」か「外地人」かと判断したり、「朝鮮に背を向けた」と捉えたり、要はアイデンティティーの所在をどちらかに求めることは、おそらく暗黙のうちに日記を書き手の心情を直接的に記し

8 金暉我『在日朝鮮人女性文学論』(東京：作品社, 2004). p.17.ちなみに本書では、宗秋月、李正子、李良枝、深沢夏江、金真須美、柳美里が取り上げられている。

9 成美子「にあんちゃんはいま 二世の眼」(23)『朝鮮研究』232号, 1983, p.26.

10 磯貝治良『始源の光』(東京：創樹社, 1979), pp.205-206.

11 論者によって微妙に力点をおく箇所が異なり構成員にも差異が見られるが、世代による時期区分を用いているのは、磯貝治良、川村湊、林浩治など数多い。ただし林相珉は同掲書において、第一世代を最も正当な民族性をもつとみなし、第一世代との距離において第二世代、第三世代を叙述することに意義を申し立て、宋恵媛は世代区分の定義が曖昧であり、俗に一世と括られる人々の朝鮮体験も多岐にわたっていることから、世代論の限界を指摘する(参照は、宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために』(東京：岩波書店, 2014), pp.22-24).

12 朴裕河「一九六〇年代における文学の再編」(『思想』955号, 2003.11), pp.108-112.

たものとする前提があるからだろう。しかし、日記とは完全に他者から独立して私的な心情を書きうるものだろうか。川村湊は、先述の先行研究と同様に末子が自身の出自を直視していないとするが、他方で作文を指導した教師、あるいは光文社の編集者による一種の「検閲」を示唆する¹³。つまり、末子による日記が外部の影響を受けて生成された可能性を示している。

これまで本書においては、民族的アイデンティティーを表現することが期待され、また日記という媒体に、筆者の心情が書き込まれていると自明視されてきたことが要因となって、「在日朝鮮人らしさ」か、もしくは日本人と同一かという、どちらかに収斂する形でしか筆者の立ち位置が考慮されてこなかった。

『にあんちゃん』とは、在日朝鮮人の子どもが日本語で書いた日記であり、在日朝鮮人であるために悪口を言われたとローマ字で書き込まれている箇所が存在する。しかし、このような場面においてもその記述は淡白で、直接的に自身や家族が在日朝鮮人であることに言及すること自体、先述の次兄・高一の日記を含めて3回、それぞれ2節と4節で後述するが末子によるものでは2箇所のみである。結論を先取りしてしまえば、在日朝鮮人としてのアイデンティティーを明確に表明する形で日記が書かれなかったということは、筆者が在日朝鮮人でありながら日本語教育を受ける子どもであったことに起因する。いまだ自己形成の過渡期にあり、在日朝鮮人と日本人との境界上に置かれていたのが『にあんちゃん』を書いた当時の「安本末子」という人物ではなかったか。本稿では、『にあんちゃん』における記述を、二項対立的な図式に収斂させるのではなく、在日朝鮮人の子どもの表現として問題化してみたい。

1節では、戦後の炭鉱に暮らす在日朝鮮人の家族の背景を確認する。炭鉱で働くことと、在日朝鮮人家族の持つ歴史性を踏まえた上で、安本一家の状況が戦後の日本の貧しさと受け取られてしまったコンテクストを1950年代の炭鉱失業者問題から整理する。2節では、1950年代の生活綴方教育の流れから、末子にとって国語教育の中で日記を書くということが日記の三人の読み手との関係性の中で行われていたことを明らかにする。これを踏まえ3節では、朝鮮人であることによって受けた非難が唯一ローマ字で書き込まれた箇所を取り上げ、筆者の想定する読み手との内的交渉である「自己検閲」の結果、ローマ字が選択されたことの意味を論究する。

¹³ 川村湊『作文の中の大日本帝国』（東京：岩波書店、2000）、p.110.

2 戦前と戦後を生きる ― 炭鉱の朝鮮人家族

安本一家は、戦前、戦後の炭鉱を生きた在日朝鮮人家族である。後述するが一家が炭鉱の貧困の一部と見られることはあっても、在日朝鮮人の炭鉱労働者の家族であることはこれまで前景化されてこなかった。日記は兄弟の父親が亡くなった直後に始まるが、筆者の置かれていた状況を確認するために、まずは日本に渡航した両親のことから始めたい。光文社初版裏表紙によると、安本兄弟の両親が渡航したのは1927年で、母親は末子が3歳の時に、炭鉱の臨時雇いであった父親は末子が10歳の時に亡くなり、「逆境のうちに一を送った」という。元は豪農だったが、祖父の代に借金の保証人になったことで破産して北九州に渡り、小さな炭鉱で生きることになった。こうした両親の背景には、1910年のいわゆる「日韓併合」以降、植民地支配のもたらした経済的混乱と土地取用令によって、生活基盤をなくした農民たちの多くが日本に渡航したことが考えられる¹⁴。

また、敗戦後の炭鉱に残留したことはどのような意味をもつのだろうか。1945年6月末時点の炭鉱労働者の割合は次のようなものである。一般232,555人(58.6%)、短期21,336人(5.4%)、朝鮮人124,025人(31.3%)、俘虜9,719人(2.4%)、中国人9,077人(2.3%)¹⁵。日本政府は敗戦直後、石炭が現物賠償の対象とされる可能性から、出炭率の低下を恐れ、朝鮮人応徴者の即時解除を行わず出炭作業を継続しようとした¹⁶。相次ぐ抗議運動に対し、1945年11月1日にGHQの参謀第3部(G3)は「非日本人の帰還」(SCAPIN224)を政府に提示し、帰還者の蝟集ですでに大混乱にあった門司-下関-博多地区から、北九州の朝鮮人と中国人炭鉱労働者を筆頭に、復員軍人、元強制連行労働者、そのほかの朝鮮人の順に帰還事業を行うと方針を定める¹⁷。しかし1946年に入ると、持帰金の制限と、朝鮮半島南部の政治情勢不安や住宅・食料不足などが日本に伝えられたことにより帰還希望者は減少する。ただし帰還を延ばしたとしても、軍需関連産業の解体と引揚者の増加による失業のため、朝鮮人の働くことのできる場所は非常に限定されていた¹⁸。

以上から、「逆境のうちに一を送った」という安本兄弟の両親の姿が、わずかな実体をもってくる。情報混線も十分に想像される中で、G3の指示が地方の炭鉱まで即時にどの程度適用されたかは定かではない。帰国を求める人々の混乱のなか、4人の子とも帰国することは決して容易ではなかっただろう。両親の渡日した経緯に関する事実関係については、本稿の及ぶところではない。しかし、上記のような背景をふまえれ

¹⁴ 樋口雄一「在日朝鮮人部落の成立と展開」(注7と同掲書)、p.549。

¹⁵ 田中直樹「戦時期における朝鮮人鉱夫の雇用状態」(注7と同掲書)、p.608。運輸省鉄道総務局『石炭鉱業の展望』(運輸調査局、1947)による統計を田中がまとめたものを参照した。

¹⁶ 加藤晴子「在日朝鮮人の処遇政策確定過程にみられる若干の問題について——一九四五年～一九五二年」『日本女子大学紀要 文学部』33号、(1983)、p.46。

¹⁷ 金太基『戦後日本政治と在日本朝鮮人問題』(東京：勁草書房、1997)、pp.156-159。その際、台湾、沖縄、中国南部への帰還は一時中断し、朝鮮、中国中部への帰還に重点を置くよう日本政府へ指示が出された。

¹⁸ 金太基、同掲書、pp.185-188。

ば、1927年時点で日本へ渡航し、残留した要因を両親の自由意志とすることはできないことに留意しておきたい。

このような経緯も想像されうる中で、安本兄弟は戦後の炭鉱に暮らしていくことになるが、臨時雇いとして炭鉱で石炭の運搬を行っていた長兄は、1953年の9月に解雇されてしまう。青地農は1959年に筑豊炭田を訪ねたルポルタージュ記事の中で、はじめ『にあんちゃん』における貧しさは朝鮮人という特殊性によるものと思っていたが、「こんど筑豊の失業地帯を歩いてみて、その悲惨はむしろ『にあんちゃん』以上であることに驚いた」¹⁹と述べている。林相珉はこれに対し、日記が書かれた1953年は「朝鮮特需」に沸く時代であって、安本兄弟のおかれた状況は炭鉱不況の日本人の話とは考えられないはずだという²⁰。

確かに林のいうように、日本人一般の状況と安本兄弟の状況を同一視することはできない。ただし、日記が書かれてから出版されるまでのタイムラグの間も含め、1950年代の炭鉱産業にはドラスティックな変化があった。青地がなぜこのような印象を抱いたかという点を把握する意味を含め、この時期の炭鉱不況と炭鉱失業者の問題を確認しておこう。在日朝鮮人炭鉱労働者としての安本兄弟の位置づけがより明瞭になるはずである。

林の指摘に反して、石炭産業は1952年時点ですでに陰りを見せ始め、賃金の据え置きと標準作業量を要求し、10月以降日本炭鉱労働組合はいわゆる「63日間のストライキ」に突入している。長引くストライキに世間の不信が募り、エネルギー源の転換が図られた。大手企業では希望退職という形で人員整理が始まり、労働組合の抵抗によって指名解雇を撤回させた最大手の三井三池炭鉱を除き、1953年7月以降の時点で2万人が人員整理の対象となっている²¹。各産業界の不振への対応を協議する1954年の労働者対策連絡協議会でも、石炭、造船業は大きな問題とされていた²²。

つまり、1953年9月に長兄の喜一が解雇されたことは、炭鉱不況の第一の波を受けたといえる。日記中にも、労働組合の前で首切り反対の訴えがあったとあり(1953年8月29日、p.95)、兄が解雇された際も、「会社は、りんじ(臨時)からまっさきに首を切ったのです」(1953年9月8日、p.97)と、当時の炭鉱界隈の斜陽が書き込まれている。

1955年8月に石炭鉱業合理化臨時措置法が制定されてから出版年の1958年にかけては、とくに中小炭鉱で多数の失業者が生じている²³。このような時勢にあって、異例の反響を呼んだのが、福岡県失業対策本部による報告書『炭鉱離職者の生活実態』である。

19 青地農「遠賀川流域の暗黒」(『文藝春秋』, 1959.11), p.120. ほか、杉浦明平も「考えてみれば、この本は安本一家の離散と貧窮の記録だけでなく、いま北九州一带にひろがっている目を覆いたくなる廃鉱と、そこに働いていた炭鉱労働者全体の運命の予言ではなかったろうか」と述べている(杉浦明平, 同掲書, p.39.)。

20 林相珉, 同掲書, p.20.

21 市原博『炭鉱の労働社会史』(東京: 多賀出版, 1997).

22 労務省職業安定局失業対策部編『炭鉱離職者対策十年史』(東京: 日刊労働通信社, 1971).

23 労務省職業安定局失業対策部編, 同上, p.1.

同書のルポルタージュ記事では、未払い賃金を要求する組合運動によって解雇されたことなど、大手炭鉱よりも苛烈な中小炭鉱の疲弊が訴えられるほか、とくに炭鉱の集合住宅に暮らす子どもの写真が多く掲載され、子どもの生活環境の劣悪さや不就学児童の多さが報告されている²⁴。また小規模なものではあるが、1959年8月の炭鉱失業者を支援する黒い羽根運動に先んじて生じたのは、降雨の度に学校を欠席する子どもたちへ雨傘を送るという運動だった²⁵。

親が子を捨てるといった事例も生じ、1950年代後半の炭鉱失業者問題において、最たる被害者として世間の耳目を集めたのは炭鉱の子どもたちだった。『にあんちゃん』よりも出版の時期は後になるが、親のいない炭鉱の集合住宅に子どものみで暮らす姿や、野間宏によるまえがきが評判を呼び、土門拳による写真集『筑豊のこどもたち』が10万部のヒットを生んだことから、炭鉱の子どもたちに対して世間の関心が一定数あったと推察される²⁶。

また三井三池炭鉱のような大手炭鉱で解雇の差し戻しを巡って果敢な組合闘争が行われる一方、1960年前後の中小炭鉱では組合闘争もままならなかったという状況がある。兄が臨時雇用であるため、「ストをされたら、はたらかれないので、お金がなくなります。そして、いくらなくなってもせき(籍)がないから、ろうどう組合から、かりることもできません。」(1953年7月25日, p.85)と書く状況が、青地には瀕していく中小炭鉱労働者に、同時代の人々には戦後の貧しい時代と重なり合ってみえた。

『にあんちゃん』のベストセラー化は、当然のことながら子どもによる日記であるという点が大きく作用しているだろう。それは子供の目線で書かれた貧しさの描写が卓越していたということもあるが、当時の世間において、炭鉱の失業地帯における子どもたちへの注視があったこととも連動している。『にあんちゃん』の出版と前後して、1960年前後炭鉱失業の犠牲者たる子どもたち、という印象のために、安本一家の貧しさは日本人の中小炭鉱における失業者の抱えた問題と同一視されてしまったのではないか。

兄の働く大鶴鉱業所も1957年には閉山されており²⁷、炭鉱不況の影響があったことには相違ない。しかし、そもそも長兄は父親を亡くしてすぐ、正規職員にしてもらえないか掛け合った際、「ちょうせん人」だからという理由で断りを受けている(1953年1月26

24 福岡県失業対策本部『炭鉱離職者の生活実態』(福岡：福岡県政研究会編集部, 1954)。

25 永末十四雄・笠井勲編『マス・コミを通じてみた“黒い羽根運動”の一年』(福岡：田川郷土研究会事務局, 1960), p.4。

26 土門拳『筑豊のこどもたち』(東京：パトリア書店, 1960)。以下に野間による前書きを一部抜粋する。「私を圧倒した印象は、何よりも、やせはてて内から伸びる力を失い、皮膚が肉を離れて存在するかと見えるような、子供たちの印象だったが、子供たちの父親は絶望にとりつかれて子供と妻と母親をすててどこかへ姿を消していたのである」。

27 坪内安衛ほか編『佐賀県石炭産業資料』(佐賀：佐賀県商工労働部公務課, 1986), p.164。戦後の在日朝鮮人労働者の数は明らかではないが、参考として1940年時点で杵島炭鉱における朝鮮人労働者の数は513人と佐賀県内では最多で、同炭鉱内での全鉱員に対する比率の10%ほどの人々が戦時中の採炭にあてられたという。また、他の大手と比べると、住之江海運そのほかをのぞいて関連企業はない「典型的な、代表的な中小資本」であるが、佐賀県内では最大手で、1957年現在で鉱員4600人、職員540人、組合による職場闘争も盛んに行われていた(参照は、佐賀県委員会常任委員会「杵島炭鉱の闘争」[『前衛』135号, 1957], p.90)。

日、p.13)。在日朝鮮人労働者は敗戦直後にあっても徴用が維持され、その後の石炭好況期には人手不足の炭鉱を支えながらも、炭鉱不況に転じると真っ先に解雇されなくてはならなかった。いわば炭鉱という場の暗部を引き受け続けた在日朝鮮人の姿は、安本一家が辿った軌跡とも想像されうるように、本来『にあんちゃん』というテキストの低音部にあるはずだ。

ただし、ここでも問題となってくるのは末子の記述のありようである。前述の「ちょうせん人」だから正規職員となることを断られたという日記では、「どうなるかわかりません」とのみ結ばれていて、それ以上の言及はない。次節では、末子にとって日記を書くという行為がどのようなものであったのかを検討する。

3 書くことをめぐる干渉と応答

長兄が1957年12月に光文社に送付した17冊の日記は、初版裏表紙の写真から確認できるが、その中には「国語ノート」と書かれた数冊がある。17冊全てが学校に提出されていたかは定かではないが、先生によるコメントと末子の応答から考えると、日記を書く習慣は当時の国語科における教育の一環から醸成されたものだろう。本節では、当時の生活綴方教育と関連付けつつ、日記を書くという行為がどのようなものか考察する。

はじめに在日朝鮮人の子どもが受けた教育を確認すると、1947年に教育基本法や学校教育法が制定され、戦後民主主義教育が始まったことと軌を一にし、1948年から「朝鮮人設立学校の取扱について」において、日本人同様の教育基本法、学校教育法に従う指示が出されている。これは教育用語を日本語に限り、朝鮮語などの民族教科を正課とするを禁ずることを意味し、小林知子によれば、このような朝鮮語教育を含む戦後日本の民族教育の弾圧を思えば、「在日朝鮮人の戦後は、形式的には「平時」の日本社会にありながらも、民族的アイデンティティを追求し表明する限り、東アジア冷戦のもたらす「戦時下」さながらの抑圧にさらされた」ものであったという²⁸。

安本末子が小学校で受けた教育も日本人と同じようなものであったと考えられ、朝鮮の文化に触れる機会があったとしても、こと教育においては、日本に準拠したものにも偏っていた。末子の普段接する「国語」は日本語を指し、教育は日本人の大人になるために行われた。

ではこのような国語教育の中で日記を書くということは、どのような方針によるものだったのだろう。末子が小学生だった時期、盛んに行われていたのは「生活綴方教育」といわれる日々の生活における題材から、書くことを通して自己認識を促進しようとする学習である²⁹。一般に、日本における戦後の「書くこと(作文・綴り方)」教育は、「昭和二

²⁸ 小林知子「未済の帝国解体」(『岩波講座 アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争経験』、東京：岩波書店、2006)、pp.209-234。ちなみに、1952年の時点で、朝鮮人のみを対象とする学校に通う児童・生徒の総数は、全体の約1割程度だったという。

十二年度(試案)学習指導要領 国語科編(1947年12月20日)、および「昭和二十六年(一九五一)改訂版 小学校学習指導要領 国語科編(試案)」(1951年12月15日)によって公教育としての内容・体制を整えたとされる³⁰。1948年には「作文の会」によって『作文』(八木橋雄次郎編, 国語文化学会, 1948年)が創刊され、1949年末には「日本綴方の会」が発足されるなど、学習指導要領に即した国語科としての作文教育運動が展開される³¹。子どもが見聞きし、感じたり考えたりしたことを書くことを通して、自然や社会についての認識、集団のなかでの自治と判断、行為、行動の仕方などを育てようとする教育活動の記念碑的実践が、無着成恭が自身の担任する中学校生徒の綴方を集めた『山びこ学校』(青銅社, 1951年)である³²。生活綴方教育の特徴は、単なる作文表現の指導ではなく、書かれたものからひとりひとりの児童が見聞きし、感じたり考えたりしたことを把握することで、広く学校教育活動に応用しようとする生活指導を行おうとする点、集団教育の中で各々の認識能力を高めようとする点である³³。

後述する末子の担任の滝本先生の指導は、綴方教育の流れを汲んでいると予想される。ここまでをまとめると、『にあんちゃん』は、在日朝鮮人の子どもが、国語としての日本語教育の中で、現実社会への認識や自己認識に関する指導を受けながら書かれた日記であるといえる。また、集団教育の一環とされるように、綴方教育は他者に日記を読まれることとセットで行われる場合が多い。たとえば同時代の小学校教員によれば、ある児童の日記を取り上げ、書かれた出来事に対して当事者および学級全体から意見や批判をもらうことによって「日常生活の生まな指導」を行ったという³⁴。

『にあんちゃん』では日記の読み手は主に3者である。担任の滝本先生、一番上の兄、同級生の多賀千晶で、日記からは滝本先生や兄によるコメント、千晶による感想が確認できる。たとえば滝本先生によるコメントは、「「安本末子」と、きゅうに先生から大きな声で呼ばれたので、びくっとしました」と書いた日記に対し、「(「ごめん、ごめん」ぼくの声は大きい(略)——滝本) とやや小さなフォントで付されている(1953年6月12日, pp.60-61)。おそらくこれは、日記帳に滝本先生が直接書き込んだコメントを、出版に際してそのまま掲載したのだろう。

しかし日記中、上記のような形式は少なく、確認できるコメントの多くは、末子が自身の日記中において、先生や兄からもらったコメントを自身の手で書き込み、さらにそれに対する末子の感想を書き加えたものである。つまり、日記に読み手が存在し、そ

29 メアリ・キタガワ, チサト・キタガワ, 監訳・川口幸宏, 中島和美『書くことによる教育の創造』(東京: 大空社, 1991), p.3.

30 菅原稔「戦後作文・綴り方教育史研究——昭和20年代における「作文」「綴り方」の位相と実践理解——」(『岡山大学大学院教育学研究 究科研究集録』146号, 2011), p.19.

31 日本作文の会編『日本の子どもと生活綴方の50年』(東京: ノエル, 2001).

32 小玉茂夫「山びこ学校」(『戦後思想の名著50』東京: 平凡社, 2006), pp.114-126.

33 滑川道夫「生活綴方の作品・表現を活用するさまざまな実践」(『講座・生活綴方4 生活綴方と教育実践』東京: 百合出版, 1962), pp.30-35.

34 小西健二郎「「生活指導」「なかまづくり」と生活綴方 A小学校の場合」(注33と同掲書), pp.77-88.

の感想から筆者が考えたことをさらに書き込むという、いわば書く行為をめぐる読み手の干渉と筆者の応答が交わされている。読み手に応じて、それぞれ一例を挙げてみよう。まず滝本先生について、筆者は以下のようにコメントを書き写し、日記を始める。

家に帰ってきて、日記をひらいてみると、「日記六」とかいた帳面に、赤インクでかいた紙がでてきました。紙には次のことが書いてありました。

「先生は日記を夜おそくまで読ましてもらいました。なみだにぬれながらね。まじめにこんきよくかいています。感心しました。毎日毎日の生活を反省しながら、一步一步よい子供になっているのがわかります。くるしい生活。さびしい生活。それは、ほんとうにつらいことです。けれども、それにまけてはなりません。思うようにならないのがこの世界です。けっして、けっしてまけてはなりません。(中略)

お父さんやお母さんのいないつらさは、口ではいええないものです。けれど、戦争で孤児になった子供たちとくらべると、りっぱな兄さんがあり、やさしい姉さんがあることだけでも幸福です。」(中略)

先生のかかれたとおり、「どんなにつらいことでも、まけてはいけません」それはほんとうです。どなくなるしいことでも、かなしいことでも、まけず、りっぱに生きていくことです。先生が、私のくるしかった生活にみかたしてはげましてくださったので、くらい心があかるくなりました。(1953年6月20日, pp.62-64.)

綴方教育をどの程度生活指導に結びつけるかは教員によるが、滝本先生の場合は、末子の家庭状況を把握し、必要であれば援助を行うというように、生活指導を行うために日記を効果的に用いていたようである。しかしここでの励ましは、当時の日本の「日本人」の戦災孤児を引き合いに、「思うようにならない」ことや「つらいこと」が在日朝鮮人という出自に結びつくような回路は閉じられたまま、とにかく「まけてはいけません」と指導が行われている。前述の小学校教員が実際に行った指導として挙げているのは、児童が「こじき」と悪口を言われた出来事を書いた日記を取り上げ、当事者の心情を想像し悪口を言った児童に反省を促すというものであるが、しかし現実の「貧しさ」に教員が対処することはできず、教師も児童もできる範囲で問題解決への姿勢を学ぶもの、と指導の限界が注記されている³⁵。滝本先生の指導にもこのような「限界」は見受けられ、対して末子は「つらいこと」を直視するよりも、とにかく「りっぱに生きる」という前向きさを書き込んでいる。

一方、作文の展開や表現の技術的な指導を行おうとするのはむしろ長兄の方である。

兄さんから、私にてがみがきました。びんせんに七まいもかいてあり、その文は、私を作文に力づけ、そして泣かせました。次の文が兄さんからきたものです。(中略)

³⁵ 小西健二郎, 同掲書, pp.80-81.

「末子、兄さんはあなたの文を作る力は大変しんぼしたと思います。一年ちよつと前、日記をつけはじめたころのものどくらべると、よくわかります。(中略)

ざっしに入選作文などがのっていると、かならずのように、この作文は、どこがよく入選したか、なぜこんなにおもしろくかんじるか、とひひょうしてきかせたものでしたね。また、かさくのもので、どこをかきたせば、もっとよくなったか、とせつめいしてあげたこともありましたね。(中略)よいと思った文章を、帳面にかきうつさせて、文を作るコツをおぼえさせようとした兄さんの熱心な気持ちがわかってもらえますか。」(1954年3月27日, pp.138-142)

この後に長兄は、長い文章を書く練習として「滝本先生」という題で作文を書くように宿題を出し、末子は作文を書き込んでいる。亡くなった母の無念を受け継ぎ(1954年5月7日の日記に引用された長兄から姉へ宛てた手紙, p.172)、母がわりに振る舞おうとする兄の熱心さの裏には、両親から『『ゆたかなじょうそう』』(1954年3月27日, p.143)を受け継いでいるはずの弟妹には、それに見合う教育を受けて欲しいと願っている。このような願いは、自身の両親らの不遇を鑑みて、今後日本社会で生きていくための武器を得てほしいという長兄の心情も想像されるものだが、その情熱に「力づけ」られ、末子も熱心に日記に取り組んで行こうとする姿勢を書き込んでいる。

また一度の書き込みが確認されるのみだが、友人の多賀千晶も日記の読み手である。誕生日会でプレゼントを渡すことができなかつたお詫びに日記を見せると、大変に喜びお礼に日記帳やハンカチをくれる(1954年4月8日, pp.157-158.)。実は日記では、病院の一人娘で性格も良い学校の人気者として千晶への憧れが繰り返し語られていて、おそらくこのような記述を千晶も読んだからこそその喜びようなのだろう³⁶。

生活綴方教育の中では、生徒同士互いの書いた文章を批評し合うことも教育の一環とされ、集団的な価値判断を育て、「子どもたちはひとりの仲間の個人的な生活の内部にふれた綴方を読み、それについて話し合うことによって、その仲間を人間としていっそう深く認識するようになる」³⁷という。いわば日記という個人的な記述の中に大事な友達と書かれていたことが、親密度の確認となっている。さらに、日記を読むこと千晶の姿を受けて、「うれしさで、いっぱい心。自分の喜びの心」(1954年4月8日, p.159.)と日記に書き込むことで、千晶の喜びへの応答を示している。

ただし個人的な記述といっても、千晶に日記を見せる際、「へたかけん、だいにもみせんどいてね」と念押しがあくまで巧拙の問題とされているように、日記を読まれ、書いてある内容を知られること自体は恥ずかしいことではないのだろう。ここまで三者の読み手から考察してきたように、日記を人に見られるということは十分に起こりえた

36 ちなみに先述の長兄からの手紙(1954年3月27日, pp.140-141.)には、千晶の誕生日会の際の日記で千晶を褒めた箇所を取り上げ、「もしかりに、千晶さんのお母さんが、末子のその作文をよむことがあれば、ほかの人たちより、末子をたんじょう日によんだことをよろこびなおすのではないかと、他者に日記を読まれる際の感想を見越した指摘が行われている。

37 小川太郎『生活綴方の方法論・その特質』(『講座 生活綴方』東京：百合出版, 1961), pp.172-173.

はずだ。

もちろん、全ての日記が常に先生と兄、友人の三者、あるいは誰かに読まれていたとは言いがたく、たとえば「滝本先生はおもしろいときはおもしろいが、あらいときにはとてもあらい」(1953年4月6日, p.31.)と兄弟で話をしたことが書かれていることから、学校に提出していた日記以外にも想定される。ただ、日記を書くという行為そのものについて、完全に秘匿された行為として他者から独立していたとも考えにくい。読み手に向けた直接的な言葉ではないにしても、読み手を想定して、筆者内部における規制が働きうることは十分に想像できるからである。

三人の読み手に対する末子の位置付けをまとめると、滝本先生に対しては、国語教育の中で日記に真面目に取り組み、りっぱに生きようとする生徒、兄に対しては、勉強に励み、社会に適応していくための能力を身につけようとする妹、多賀千晶に対しては学校という同一集団の中での友達、と整理できる。末子による日記は、それぞれの読み手との関係性が重なり合う中で生成されていたといえるだろう。

安本末子によって書かれた日記は、筆者の心情が直接的に表されたものではなく、三者の読み手による干渉と、末子の応答の結果であった。読み手は日記を読む際に、筆者がどのような存在であるかを想定し、願望を示す場合もある。ここで重要となるのは、おそらく滝本先生と多賀千晶において想定されていた筆者は、日本人と変わらない、あるいは在日朝鮮人と意識されないものであった点である。生活綴方教育の中で友達の作文を読み、「個人的な生活の内部」に触れることがあったとしても、たとえば在日朝鮮人であるための貧しさや差別は、学級で解決できる範囲を超えた問題として深く踏み込まれはしなかつたろう³⁸。

あくまでも子どもである筆者は、このような国語教育の中で日記を書いていた。読み手の持つ基準に応答して自身の態度や心情を書き込みながら自己形成を行うという、この揺らぎこそ日記の記述を考える鍵になる。

4 自己検閲される「日記」——ローマ字という暗号

以上日記が、三者の読み手との関係性が重なり合う中で、筆者末子が相対的に自己を構築する場であることを確認した。本節で問題化するのはこのようにして書かれた日記の記述をどのように捉えるかである。

一節で先述したように川村湊が示唆する「検閲」の可能性は、日記が書かれた後に行われる指導や、出版に際しての削除や選定を意味しているだろう。つまり、事後的かつ直接的な「検閲」である。ここまで確認してきたように、『にあんちゃん』は、在日朝鮮人

³⁸ 林相珉は、『にあんちゃん』を題材とした読書感想文においても、筆者が在日朝鮮人であることに触れた作文では、「深読み」することが避けられ、「なるべくできることはしてあげたい」と生徒が「内省」する形で結ばれていることを指摘する。(林相珉, 同掲書, pp.23-28).

である末子が日本語教育の一環において、他者に読まれることを前提として書いた日記である。だとすれば、事後的かつ直接的な「検閲」の目以外に、日記を書く段階での筆者の内部で生じる規制についても留意しなくてはならない。そのうえで、在日朝鮮人であることをめぐって書かれた残りのひとつ、日記中唯一のローマ字による記述について考察する。

紅野謙介によれば、検閲というシステムは、単純な抑圧と被抑圧から構成されるのではなく、複数の権力主体の中での対立や葛藤、また検閲される側に内面化された権力の中で生成されるという。検閲される対象は、いわば検閲する主体を自身に刷り込み、検閲の基準を想像しながら処分を避けるために事前のチェックや伏字、削除といった自己検閲を行う。その際、検閲される対象は、「何を書くかという志向は、何を書かないかという抑制とともに表現する主体のなかでたえず葛藤を起こす」³⁹。

もちろん上記の引用部で問題とされている複数の権力主体とは、総力戦体制の中で成立した「情報局」の中で、陸軍省、海軍省、内務省が各自の権限を維持したまま、情報の収集・統制・発信が並行して進められたことを指して、末子の日記における三人の読み手とはレベルの異なるものである。ただ検閲というシステムは、権力が単に行使されることを意味するのではなく、検閲される側が検閲する主体を自身に刷り込む「自己検閲」を含む。そして「自己検閲」の結果として、伏字や削除のように、筆者が書こうとすることと、書かずにいようとするものが齟り合わさった痕跡が表記として残る、という要素がここでは重要である。安本末子にとっての日記を書く行為には、いわば「自己検閲」が働いている。

引用は、兄が解雇されてから、「にあんちゃん」と一緒に住ませてもらっている宮崎さんの家での出来事を記した日記である。

ここにはおられませんのです。なぜかって、きのどくだし、おれといっても、こっちからことわります。なぜかというWatakushiga sigotowo sinaikarakamo siremasenga, watakusino warukuchio, itte orarerunodesu.Watakushiniwa tumetaku ataru nodesu. Soremo niantyannno orarenai tokidakedesu.“Binbō tyōsenjin deteike Oigatanoeniorasen” [わたくしが 仕事を しなないかもしれませんが 悪口を 言っておられるのです。わたくしには 冷たく 当たるのです。それも にあんちゃんのおられない 時だけです。「貧乏朝鮮人出て行け おいがたの家におらせん」——論者注]といわれるのですから、おればつめたい目でにらまれて、やせるばかりです。(1954年6月17日, p.192).

次兄のいない間に、宮崎家の子どもから、大人がこのような話していると告げ口されたのだ。しかし、宮崎家から「にげだしたい」とはいうものの、そのために行き倒れても「運なのですから、私はあっさりあきらめて、その日のくるのを待っております」

39 紅野謙介「文学を検閲する、権力を監視する」(『検閲の帝国』, 東京: 新曜社, 2014), pp.40-42.

と続く。宮崎家の人々を責めようとはしない記述は、居候させてもらっていることへの遠慮やふとした瞬間に日記が宮崎家の人々の目に留まることを憂慮したものとも考えうるが、このような「自己検閲」は一般的な日記についても言えることだろう。上記で特殊なのは、在日朝鮮人であることについて受けた非難を書こうとすることと自己検閲の繕り合わさった痕跡がローマ字という表記をとっている点である。

何が書かれなかったのかを特定することは不可能であるが、引用部については朝鮮人であるために悪口を言われたという内容が書かれ、しかし日本語表記では書かれなかった、ということが出来る。「何を書くかという志向は、何を書かないかという抑制とともに表現する主体のなかでたえず葛藤を起こす」という説明に沿ってみると、いわばこの箇所では、この出来事を書かずにはいられなかった心情と、しかし日本語表記では書けないという葛藤がローマ字という表記をとっていると言い換えられる。

では、なぜ日本語表記では書けないのだろうか。三節で見たように、筆者にとって日記を書くという行為は、読み手の想定する基準と照らし合わせながら自己を構築していく行為である。つまり、ここでは国語としての日本語教育を受け、日本人の集団に属しながら、在日朝鮮人であるために差別を受ける存在であることを日本語表記で書き込む自身の姿が、筆者にとってうまく像を結ばなかったといえるのではないか。

これまで末子は、日本人と同じように、国語としての日本語教育の中で日記を綴ってきた。消極的に日本人の集団に自身が属することを示すのが、日本語で日記を書くという行為である。各読み手との関係性を軸にさらに考察してみよう。滝本先生は、筆者が国語教育において日本語で日記を書くからこそ、これまで指導を行ってきた。日本語表記で今回の出来事を書くとしたら、いつもの、他の日本人の生徒に対するものと同じような、在日朝鮮人であることには踏み込まない励ましと指導を行い、末子は日本人生徒一般の問題と変わらないように、自身を鼓舞する応答を書き込んだだろう⁴⁰。また多賀千晶は、日本人の友達と同様に末子と親しくしてきた。日本語表記は、本質的には共有しえないはずの末子の悲しみを共有しうるような錯覚を呼び、滝本先生と同じく励ましを受ければ、末子は応答しないわけにはいかない。一方で兄は、同じ在日朝鮮人の家族として立場を共有しながら、弟妹に代わって自身が働くことで、日本社会で生きていくに足る勉強をさせたいと思ってきた。兄が教育を受けさせてくれた結果である日本語表記によって、兄の努力を無に帰すような非難を書き込むことはできなかったのではないか。

筆者が在日朝鮮人であることは、滝本先生や友達が知るところではあったのだが、国語としての日本語教育を受け、日本人の集団に属していることを担保する日本語表記によって書かれた日記は、これまで筆者が在日朝鮮人であることを本質的には不可視化してきた。日本語表記の中に一箇所だけ挿入されているローマ字は、視覚的なレベルで

⁴⁰ 4日後の日記では自己修正のように、「私は、おじさんをうらむことはありません。はじめは助けられたのです。いままで、おいてもらっただけでも、ありがたいことです」(1964.6.24, p.195)と宮崎家の人々を責めず、前向きに生きようとする決意が述べられている。

も異質で、暗号のように書き込まれたローマ字を、成美子は「朝鮮人であることに対するこだわり」⁴¹とする。たしかに、在日朝鮮人であることで受けた悲しみを日本語表記で書かないことに筆者の意志を読み取ることもできるが、ローマ字という表記から、筆者の立場をさらに考察してみたい。筆者は当時、国語教育の一環としてローマ字を学習していたのである。

ローマ字が義務教育において取り上げられたのは、1947年2月に文部省の発表した「国民学校におけるローマ字教育実施要項」からである。ローマ字教育は原則として第三、第四学年の国語か自由研究の時間に行くとされ、1950年2月の文部省の調査によると、小学校では84.3%、中学校においては48.1%において実施されていた⁴²。ローマ字教育の意義は、あくまで国語教育に還元されるものと目されていて、その多くは国語科教育の中で行われた。平井昌夫は、文部省の指針とその後の実施状況から、ローマ字教育の効果に、表音性や単音声を利用することによって、日本語の特質や構造の説明を行いやすくなることや、漢字カナの学習が追いつかない児童の読み書きの手段となることなどを挙げている⁴³。

筆者においても、ローマ字のときにABCの歌をならったとあり(1953年6月8日, p.55.)、暗号のように書き込まれたローマ字は、先生や兄、同じ授業を受ける友達にも読めてしまうものである。つまりローマ字という表記は、日本語を選択していないものの、積極的に国語教育からはみ出ようとすることも選択されていない。もう少し年長であったならば、自身の出自を理解し、はっきりとした抗議と悲しみの念をもって、ハングルで書き込むことがあったかもしれない⁴⁴。自身が在日朝鮮人であるということと、在日朝鮮人であるという意識を持つことが容易に許されたかということは、異なる。ローマ字という表記は、在日朝鮮人と日本人の境界線上に置かれ、日本語教育を受ける子どもの立場にあった安本末子という筆者を象徴している。

日本人ではないと非難された出来事を書くのに、国語としての日本語教育の一環にある日記を綴るという行為のなかで書くしかない。日記を書くという行為の中で、朝鮮人であるために受けた悲しみをローマ字で書く自身に直面した時、末子は日本で暮らしながら、「外国人」とまなざされる自身の境界性をもっとも鮮烈な形で目の当たりにしなくてはならなかったのではないか。

41 成美子, 同掲書, p.27.

42 石黒修「国語教育におけるローマ字教育」(『国語教育講座第6巻』, 東京: 刀江書院, 1951), pp.33-48. 石黒によれば、占領政策の一環とまではいえないものの、ローマ字教育の導入は、1946年のアメリカ教育使節団の報告において、カナよりも長所が多く、民主的の公民としての資格と国際的な理解役立つなどとされ、1947年の報告では正規教育課程にローマ字教育を加えるよう勧告されていることが関係するという。

43 平井昌夫『ローマ字学習指導論』改訂版(東京: 開隆堂, 1951), pp.8-18.

44 成美子, 同掲書, p.30. 成の聞き取った筆者の述懐によれば、父が亡くなる前近所の子どもたちに対してハングルの教えていたといい、知識としては筆者もハングルをある程度習得していた可能性がある。ただし日記には、タイトルや詳細は明記されていないものの戦争映画を見に行った際、朝鮮人と思われる人々を「外国人たち」と指して、「アイゴウ」とか、ふしぎなさげびをあげて、その人たちは死なれました(1957年7月27日, pp.86-87)との感想もあり、日常的にどの程度使用されていたかは不明である。

5 おわりに

『にあんちゃん』という日記は、炭鉱に暮らす在日朝鮮人の子ども安本末子によって、国語教育における日本語を用いて、読み手の干渉と筆者の応答のなかで書かれたものだった。日記が、筆者の直接的な心情を表現するものではなく、読み手との関係性から生じる筆者の葛藤も含んで生成されるものであるならば、日記に対して、民族的アイデンティティーの表出か、もしくは日本人としての意識か、二項対立的に判断することは適切ではないだろう。

本稿における分析で見てきた通り、『にあんちゃん』において読み取れるのは、大人への過渡期の中で、在日朝鮮人と日本人の間でいまだ自己形成を行う過程にある筆者の姿である。筆者は子どもとして、大人との境界上、在日朝鮮人と日本人との境界上に立たされていた。二項対立的な図式で振り分けることのできない境界性を露呈させているのがローマ字による表記である。筆者は後年以下のように言及する。

ただ、いま思い返してみても、私が朝鮮人だという差別を何か受けたかという
と、何も思い浮かばないんです。(中略) [以下の感慨は著者の大学入学以降を振り
返って—発表者注] そうはいつでも、じゃあ日本人になり切れるかという、なり
切っちゃいけないんじゃないかという思いもあった⁴⁵。

長兄が「ちょうせん人」という理由で正規雇用されなかったことがはっきりと制度的な差別であるにしても、もちろん本稿では、筆者が皮膚感覚で感じ取っていた上記のような感慨の真意や真偽を探ろうとした訳ではない。『にあんちゃん』というテキストから、「Binbō tyōsenjin deteike」といわれなくてはならず、「日本人になり切っちゃいけない」と感じるような、戦後の日本で暮らすことを余儀なくされた在日朝鮮人の人々の置かれた不安定な立場や苦難をより広く考察することを目的とした。

本稿では十分に触れることができなかったが、戦前、戦後の在日朝鮮人の人々を考える場として、炭鉱はひとつのプラットフォームになりうると思う。炭鉱によって労働者の人々の構成や様相は異なるものであるが、戦前から戦後を跨ぐ在日朝鮮人炭鉱労働者の就業実態についても今後検討したい。

⁴⁵ 安本末子(聞き取り：飯田隆)「日本には感恩の情 朝鮮には深い愛着」(『朝日ジャーナル』23巻45号, 1981), pp.39-40.

参考文献

- 青地晨(1959)「遠賀川流域の暗黒」『文藝春秋』, 37(11), pp.114-120. Aochi, Shin(1959) Ongagawa Ryūiki no Ankoku. *Bungeisyunjū* 37(11), 114-120.
- 土門拳(1960)『筑豊の子どもたち』, 東京:パトリア書店. Domon, Ken(1960) *Chikuhō no Kodomotachi*. Tokyo: Patoriasyoten.
- 福岡県失業対策本部(1954)『炭鉱離職者の生活実態』, 福岡:福岡県政研究会編集部. Fukuokaken Shitugyō Taisaku Honbu(1954) *Tankō Risyokusya no Seikatsu Jittai*. Fukuoka: Kensei Kenkyūkai Hensyūbu. 33-60.
- 平井昌夫(1951)『改訂版 ローマ字学習指導論』, 東京:開隆堂. Hirai, Masao(1951) *Kaiteiban Roman Ji GakusyūShidō Ron*. Tokyo: Kairyūdō.
- 石黒修(1951)「国語教育におけるローマ字教育」『国語教育講座第6巻』, 東京:刀江書院, pp.33-60. Ishiguro, Osamu(1951) Kokugo Kyōiku ni Okeru Rōma Ji Kyōiku. In *Kokugo Kyōiku Kōza 6*. Tokyo: Tōesyojin. 33-60.
- 磯貝治良(1979)『始源の光』, 東京:創樹社. Isogai, Jirō(1979) *Shigen no Hikari*. Tokyo: Shōjyusya.
- 市原博(1997)『炭鉱の労働社会史』, 東京:多賀出版. Ichihara, Hiroshi(1997) *Tankō no Rōdō Syakaishi*. Tokyo: Tagasyuppan.
- 林相琅(2011)『戦後在日コリアン表象の反・系譜 (高度経済成長)神話と保証なき主体』, 福岡:花書院. Imu, Sanmin (2011) *Sengo Zainichi Korian Hyōshō no Hankeifu (Kōdo Keizai Seicho) Shinwato Hoshonaki Shutai*. Fukuoka: Hanasyoin.
- 金太基(1977)『戦後日本政治と在日朝鮮人問題』, 東京:勁草書房. Kim, Taeki(1997) *Sengo Nihon Seiji to Zainichi Chōsenjin Mondai*. Tokyo: Keisōsyōbō.
- 加藤晴子(1983)「在日朝鮮人の処遇政策確定過程にみられる若干の問題について——一九四五年〜一九五二年」『日本女子大学紀要 文学部』33号, pp.45-66. Katō, Haruko(1983) Zainichi Chōsenjin no Syōgū Kettei ni Mirareru Jyakkanno Mondai ni Tsuite: 1945nen-1952nen, *Nihon Jyoshi Daigaku Kiyō Bungakubu* 33, 45-66.
- 川村湊(2000)『作文の中の大日本帝国』, 東京:岩波書店. Kawamura, Minato(2000) *Sakubun no Naka no Dainihon Teikoku*. Tokyo: Iwanamisyoten.
- 金堯我(2004)『在日朝鮮人女性文学論』, 東京:作品社. Kim, Funa(2004) *Zainichi Chōsenjin Jyosei Bungaku Ron*. Tokyo: Sakuhinsya.
- 小林知子(2006)「未済の帝国解体」『岩波講座 アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争経験』, 東京:岩波書店, pp.209-234. Kobayashi, Tomoko(2006) Misai no Teikoku Kaitai. *Iwanami Kōza. Asia Taiheiyō Sensō 4. Teikoku no Sensō Keiken*. Tokyo: Iwanamisyoten. 209-234.
- 小玉茂夫(2006)「山びこ学校」『戦後思想の名著50』, 東京:平凡社, pp.114-126. Kodama, Shigeo(2006) Yamabiko Gakkō. In *Sengo Sisono Meicho 50*. Tokyo: Heibonsya. 114-126.
- きどのりこ(2013)「すなおな心と透徹した目と」『子どものしあわせ: 父母と教師を結ぶ雑誌』743号, pp.46-49. Kido, Noriko(2013) Sunaona Kokoro to Tōtetsu shita Me to, *Kodomo no Shiawase: Huboto Kyōshi wo Musubu Zasshi* 743, 46-49.
- 紅野謙介(2014)「文学を検閲する、権力を監視する」『検閲の帝国』, 東京:新曜社. Kōno, Kensuke(2014) *Bungaku wo Kenetsusuru, Kenryoku wo Kanshisuru*. In *Kenetsuno Teikoku*. Tokyo: shiyōsya. 40-42.
- メアリ・キタガワ、チサト・キタガワ(1991)『書くことによる教育の創造』, 監訳 川口幸宏・中島和美, 東京:大空社. Mary M. Kitagawa and Kitagawa, Chisato(1987) *Making Connctions with Writing*. Portsmouth, HEINEMANN EDUCATIONL BOOKS.
- 日本作文の会編(2001)『日本の子どもと生活綴方の50年』, 東京:ノエル. Nihon Sakubun no Kai(2001) *Nihon no Kodomo to Seikatsu Tsudurikata no 50nen*. Tokyo: Noeru.
- 永末十四雄、笠井勲編(1960)『マス・コミを通じてみた“黒い羽根運動”の一年』, 福岡:田川郷土研究会事務

- 局, Nagase, Toshio, Kasai, Isao(1960) *Masu.Komi wo Tsujite Mita Kuroi Hane Undōno Izhinen*. Fukuoka : Tagawa Kyōdo Kenkyūkai Jimukyoku.
- 小川太郎(1961)「生活綴方の方法論・その特質」『講座生活綴方』. 東京：百合出版, pp.172-173. Ogawa, Taro(1961) *Seikatsu Tsudunikata no Hōhō Ron. So no Tokushitsu*. In *Kōza Seikatsu tsudunikata*. Tokyo : Yurisuppan, 172-173.
- 小沢有作編(1978)『近代民衆の記録10 在日朝鮮人』. 東京：新人物往来社. Ozawa, Yusaku(1978) *Kindai Minsyu no Kiroku 10 Zainichi Chōsenjin*. Tokyo : Shinjinbutsu Ōraisya.
- 朴裕河(2003)「一九六〇年代における文学の再編」『思想』955号, pp.104-125. Park, Yuha(2003) 1960nenndai ni Okeru Bungaku no Saihen *Shisō* 955, 104-125.
- 労務省職業安定局失業対策部編(1971)『炭鉱離職者対策十年史』. 東京：労働通信社. Rōmushyō Syokugyō Antei kyoku Shitsugyō Taisakubu(1971) *Tankō Risyokusya Taisaku Jyūnen Shi*. Tokyo : RōdōTsūshinsya.
- 佐賀県委員会常任委員会(1957)「杵島炭鉱の闘争」『前衛』135号, pp.90-96. Sagaken linkai Jyūnin linkai(1957) *Kishima Tankō no Tōsō, Zenei* Vol.135, 90-96.
- 菅原稔(2011)「戦後作文・綴り方教育史研究——昭和20年代における「作文」「綴り方」の位相と実践理解——」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』146号, pp.19-27. Sugawara, Minoru(2011) Sengo Sakubun. Tsudurikata Kyōiku Shi Kenkyū : Syōwa Nijūnendainiokeru Sakubun Tsudurikatano Isoto Jissen Rikai. *Okaya ma Daigaku Daigakuin Kyōikugaku Kenkyūka Kenkyū syūroku* 146, 19-27.
- 杉浦明平(1966)「にあんちゃん どん底の中の明るさ」(1966)『朝日ジャーナル』8巻41号, pp.35-39. Sugiura, Minpei(1966) *Niantyan Donzoko no Naka no Akarusa Asahi Journal* 8(41), 35-39.
- 成美子(1983)「にあんちゃんはいま 二世の眼(23)」『朝鮮研究』232, pp.25-33. Song, Mijya(1983) *Niantyan wa Ima Nisei no Me, Chōsen Kenkyū* 232, 25-33.
- 宋恵媛(2014)『「在日朝鮮人文学史」のために』. 東京：岩波書店. Song, Hyewon(2014) *Zainichi Chōsenjin Bungakushi no Tameni*. Tokyo : Iwanamisyoten.
- 坪内安衛ほか編(1986)『佐賀県石炭産業資料』. 佐賀：佐賀県商工労働部公務課. Tsubouchi, Yasue(1986) *Sagaken Sekitan Sangyō Shiryō*. Saga : Sagaken Syōkōrōdōbu Kōmuka.
- 安本末子(1958)『にあんちゃん』. 東京：光文社. Yasumoto, Sueko(1958) *Niantyan*. Tokyo : Kōbunsha.
- 安本末子(1978)『にあんちゃん』. 東京：講談社. Yasumoto, Sueko(1978) *Niantyan*. Tokyo : Kōdansya.
- 安本末子(聞き取り：飯田隆)(1981)「日本には感恩の情 朝鮮には深い愛着」『朝日ジャーナル』23巻45号, pp.36-41. Yasumoto, Sueko(1981) *Nihon ni ha Kanon no Jyō Cyōsen ni wa Fukai Aijyō, Asahi journal* 23(45), 36-41.

奥村華子 Kanako OKUMURA

(日本)名古屋大学大学院博士課程後期課程。炭鉱労働者とその家族に関する近現代文学・文化。「プロレタリア文学による炭鉱の編成：「坑内」からプロレタリアートとしての闘争へ」(『名古屋大学人文科学研究』43-44号, 2016.3)、「廃墟をめぐるナラティブ——代弁 (representation) する炭鉱と表象 (representation) される炭鉱の狭間で——」(『日本語文学』第77輯, 2017.5)